中野市立南宮中学校　学校だより　　令和６年２月27日

南宮の里

No,7

文責：川上量広（教頭）

ホームページ　　↑Facebook も随時更新中！

２月14日（水）校長講話

命のビザ　～杉原千畝～

全校の皆さん、おはようございます。

今日は２月 14 日…2 月も半月が過ぎてしまいました。３学期始業式に「行く１月、逃げる２月、去る３月」という言葉を紹介しましたが、まさに２月が逃げるように過ぎていきます。登校日数もあと 22 日、一日一日を大切にしたいですね。

さて、今日は本年度最後の校長講話です。最後の校長講話は皆さんに紹介したい人物について話したいと思い、昨年は砂漠に水路を作り、たくさんの人の命を救った中村哲さんのお話をしました。今日、紹介するのは杉原千畝さんという方です。それでは杉原さんのお話を始めます。

杉原千畝さん…第二次世界大戦中、リトアニアという国の領事代理だった方です。この頃の地図を見てください。ここがリトアニアです。領事、という言葉は聞きなれないのですが、後ほど仕事内容がわかります。今日、主に登場する国はドイツ、ソ連、ポーランドです。

この一枚の写真を見てください。時は 1940 年７月 18 日。杉原さんの住む領事館の前にたくさんのユダヤ人が集まっていました。それは領事の杉原さんにビザを発行してもらうためです。領事がビザ発行？　これもよくわからないですね。

当時のヨーロッパ情勢を簡単に説明します。この前の年にヨーロッパでは第二次世界大戦が始まりました。地図を少し拡大します。ヒトラーが指導するドイツがポーランドに攻め込み、戦争が始まりました。ヒトラーはユダヤ人を迫害する政策を進めました。皆さんもたくさんのユダヤ人がアウシュヴィッツ収容所に送られて、虐殺されたことを聞いたことがあるでしょう。この時、ポーランドはソ連にも攻め込まれ、ポーランドに住んでいたたくさんのユダヤ人はお隣のリトアニアに逃げ込んだのです。この時は、ドイツとソ連が同盟を結んでおり、リトアニアもソ連の一部に組み込まれようとしていました。

そこで、リトアニアのユダヤ人はこの地域からなんとか遠くへ逃げようと考えます。つかまったら命の保証はないからです。その脱出ルートはシベリア鉄道を使ってウラジオストクまで行き、そこから日本に渡り、さらに安全な国に逃げるというものです。日本を通過することになるので、「この人は犯罪者などの危険人物ではないから大丈夫ですよ」という証明証が必要なのです。それがビザであり、それを出せるのがリトアニア領事である杉原千畝さんだったのです。先ほどのこの写真の人々は「杉原さん、ビザを発行してください。そうでないと私たちは殺されるかもしれないのです」という必死の訴えで並んでいたのです。

「なら出してあげれば？」という簡単な時代ではありません。当時、日本を通過して、他の国に向かう人にビザを出す場合、２つの条件がありました。①最終的な目的国の入国許可をもらっていること　②十分な旅費を持っていること　です。ここに並んでいる人たちは訴えます。①についてはカリブ海にあるオランダの植民地の島なら、ビザがなくても上陸できるというオランダの証明書をもらっていました。また、②の旅費は、今は十分持ち合わせていないが、アメリカなどに住むユダヤ人が必ずお金を集めて送ってくれるというのです。杉原さんは悩みます。この時すでにオランダはドイツに占領されており、その証明書がどこまで通用するかわかりません。また、お金だって本当に集まるのかもわかりません。一人では判断できないことと、ビザを出せばたくさんのユダヤ人が日本に入国することになるので、当然日本の外務省の許可だって必要になります。杉原さんはすぐに事情と共に電報を日本に打ちました。戻ってきた返事は、「規則を守れる人にだけビザを出すように」。でも、ここでビザを出さないと殺されてしまう人も出てくるのです。二度、三度、ビザを出したい旨の電報を打ちましたが回答は変わりません。「規則を守れる人にだけビザを出すように」。

さて、皆さんが杉原さんの立場だったらどうしますか？

皆さんが杉原さんの立場ならどうする？

A）領事として政府の決定に従う。	B）政府の決定に背いてもビザを発給する。
・政府の決定に背いたら、自分も家族も罰せられる。 ・将来は出世できる。	・目の前のユダヤ人たちを救うことができる。 ・でもドイツに命を狙われるかも。

やがて、リトアニアがソ連に組み込まれる動きは加速し、ソ連は８月いっぱいで日本の領事館を閉じ、この国から出ていくように通告してきました。杉原さんは決断します。「わたしを頼ってくる人々を見捨てるわけにはいかない」

７月２６日、ついにビザを出し始めます。このビザは「命のビザ」と言われています。リトアニアを去るまでのおよそ一ヶ月の間、休む間もなく寝る間も惜しんでビザを出し続けました。ついに８月３１日、領事館閉鎖の日が来ました。杉原さんは出国までホテルに移り、そこでもビザを出し続けました。いよいよ９月５日、出国の日、駅の待合室でも、そして汽車に乗ってからも窓を開けてホームに溢れる人々にビザを書き続ける杉原さんがいました。汽車が動き始めました。杉原さんは叫びます。

「許してください。私にはもう書けない。皆さんのご無事を祈っています」

戦争が終わり、帰国した杉原さんを待っていたのは、外務省からの言葉「君のポストはもうない」でした。外務省の命令に背いたからです。杉原さんは命のビザの話を他人にすることはありませんでした。それから 20 年以上経ち、命のビザに救われた人々が日本を訪れ、杉原さんを探し出し、新聞に取り上げられたことで命のビザのことが世の中に広がったのです。

杉原さんが救った人々はおよそ 6000 人と言われています。今では、その 6000 人の人たちの子どもや孫、ひ孫なども合わせると、およそ 20 万人と言われます。

政府の命令に従うことが当然の時代に、自らの危険を顧みず、自分の信じる正義を貫き通した杉原千畝さんの生き方を紹介しました。

これで２月の校長講話を終わります。